

漁業経済学会 短 信

1990年度漁業経済学会（第37回大会）の シンポジウムテーマ決まる

目	次
1990年度(第37回大会)シンポジウム テーマ決まる 1	最近の西日本漁業経済学会 4 20周年を迎える北日本漁業経済学会... 6
シンポジウムの準備状況(大海原宏)..... 1	国際漁業研究会の動向 6
第36回大会シンポジウムを聞いて (井手義則)..... 2	復刻本の紹介 7 会 員 動 向 7
事務局報告 3	第37回大会のお知らせ..... 8
学会への寄贈文献紹介..... 4	

1990年度（第37回大会）のシンポジウムテーマは『日本漁業の国際化－生産構造へのインパクト－』と決定した。4回にわたる在京理事会での検討がおこなわれ『日本漁業の国際化』をどのような視角からとりくんだらよいか、種々議論されてきたが、1990年度（第37回大会）では、生産構造への影響にスポッ

トをあて、水産物の需給構造（秋谷重男氏）、中小漁業経営の当面する問題（服部昭氏）、漁業労働力の需給構造（三輪千年氏）、国際化への政策対応（佐竹五六氏）などをサブテーマとして、準備を進めることとなった。コーディネーターは大海原宏氏である。

第37回大会シンポジウム －準備状況について－

大海原 宏

1990年度第37回大会シンポジウムのテーマ及び報告者等は在京理事会での準備作業を

へて次のように決まりました。

▶テーマ：日本漁業の国際化－生産構造へのインパクト－

▶報告者及び報告テーマ（仮題）

- 1) 秋谷重男：水産物の需給構造
- 2) 服部 昭：中小漁業経営の当面する問題
- 3) 三輪千年：漁業労働需給
- 4) 佐竹五六：国際化への政策対応

▶司会者：増田 洋，増井好男

▶コーディネーター：大海原 宏

準備状況について若干の報告を致します。

シンポジウム・テーマはすでに確認されているとおり、「日本漁業の国際化」とし、本年度は生産構造の変化過程に対するそのインパクトを検証することとなりました。そこで、「再構築をめぐる政策・運動論のあり方（片岡千賀之－36回大会報告－）」に加えて、10年後の国内漁業の存立構造を予見的に解明すること等を通じて、国際化の意味を再び問う、これが準備段階での討議の集約点であります。

第36回シンポジウムを聞いて

のっけから私的なことで恐縮だが、ある人に言わせると、小生は、漁業経済学会の「幽霊会員」であり、第2種兼業にも入らない「第3種兼業」会員だそうである。学会出席率は悪い、報告はしない、漁業に関する研究論文は書いていない……。確かに、無い無い尽しの足なし不良会員なのは自覚している。「会費は納めている」などとかぼそくつぶやいても、何の「足し」にもならないこともまた自覚している。

そういう小生に、「印象記を書け」と言い残し、長崎会場から東京へ駆け上がって行った三輪千年氏の大らかさは脱帽した。そして、うかうかと引き受けてしまった小生に、「どんなことでもいいんですから」と優しい(?)催促電話をくれた増井好男氏の、これまたまことに大らかな言葉に感謝しつつ、幽霊会員の勝手な印象記を書かせて頂くことにする。

今大会のシンポジウムは、「日本漁業の国際と流通・消費構造の変化」が統一テーマであった。現在の日本経済のキーワードのひとつ「国際化」が取り上げられたことは、時宜に当たっているとともに、漁業分野にとっても緊急かつ必然的な検討テーマであったと思われる。もちろん「国際化」それ自体は、漁業にとって決して目新しいことではない。しかし、テーマの副

長崎大学 井 手 義 則

題に示された“円高問題”という極めて現代的課題の日本漁業との関連、現実生じている輸入増大を始めとする諸問題の検討、さらに漁業構造変容の見通し等々に、テーマ設定の緊急性が示されていたと思われる。

小野征一郎，多屋勝雄，廣吉勝治，濱田英嗣の4氏が報告されたが、大会第1日目の一般報告での、鈴木旭，田坂行男，山本忠の3氏による研究発表も上記テーマと直接関連するもので、シンポジウムでの活発な論議を予想させるものとなっていた。

小野報告は、テーマ設定の背景は、日本農業経済学会での「農業の、国際的視野での位置づけと国際的調整の重要性」という認識と共通なものだとして、漁業でも農業同様の問題意識からの出発を強調され、モノ、カネ、ヒトの3側面に漁場利用問題を加えて、国際化をトータルに分析された。

多屋報告は、円高が水産物需給構造に及ぼす影響を、さまざまな要因や条件の絡み合いを解きほぐしながら、漁業全体と主要魚種について詳細な資料を駆使しつつ報告された。供給条件変化への漁業経営の対応についての分析を、興味深く聞かせて頂いた。

廣吉報告は、水産物貿易について、輸入問題

に焦点を当てつつその構造的特質を明らかにされた上で、自由化や円高のうねりがもたらしている変化、それをふまえた新たな課題や将来展望についての多面的な分析であったが、水産業をめぐる保護主義や産業政策上の位置づけについての廣吉氏の視点提示は大変重要だと思われた。

濱田報告は、上記3氏の報告を更に具体化して、国内水産物供給起点の産地市場すらが、円高による水産物輸入増大（構造化した水産物輸入）下に組み込まれつつある状況を、西日本市場を主対象に詳しく報告された。産地市場の特性を生かした国際的産地市場化、との問題提起は、今後の日本漁業国際化対応への重要な起点を提示されたように感じた。

以上4氏の報告をめぐって活発な議論が展開されたのだが、日頃の蓄積に欠ける小生には、報告に耳を傾け、資料を追い、討論の筋道をメモするのが精一杯であった。その中で個人的に興味深く聞かせてもらったのは、漁業にとっての国際化とは何か、漁業の再編や転換期とはどこが異なるのかという根本問題をめぐる議論、農業との比較で、漁業は構造変化にまで至っていないのではないという、国際化と漁業構造変

化との関連をめぐる議論、等であった。その程度の、内容理解に欠けた者が、注文をつけるのは大変おこがましいのであるが、最後に2、3の勝手な言い草をお許し頂きたい。

一つは、国際化をめぐる論議の際の概念規定について、である。例えば、「三国間貿易」「輸入代替」等について、フロアを含めた討論者間の認識にずれがあったようである。些細なことかもしれないが少々気になった。

二つ目は、報告者、コメンティター、司会者の間にテーマ認識上のすれ違いがあったのではないか、ということである。報告者の問題提起が生かされず残されたままになったものがあったような感じがしたのだが……。

三つ目は、次回大会への期待である。統一テーマが継続されとのことで、すでに在京理事会でその内容を検討しておられる由であるが、モノ・カネとともにヒトの国際化（築地近くの仲卸会社では、外国人労働者が冷凍マグロ解体作業に従事していると聞く）も進行している中で、このテーマの継続は、大変意義深いものと考えられるからである。

事 務 局 報 告

★在京理事会報告(1) (1989.10.27)

1.次期大会のシンポジウムのテーマ設定

大海原宏氏から企画案が提出され、検討されたが、結論にいたらず、次回の理事会で検討することとなった。

主要な議論は、国際化の構造的影響、国際化の内容の変化と構造変化との関わりについての分析視角、前川レポートに対抗できる論点の提示、漁業労働力の不足と技術問題、国際化の動きを短期変動でなく、10年後の変化としてどうとらえるか、国民経済の中での漁業の産業的位置づけ、など多岐にわたるものであった。

2.学会財政の現状

収入については、会費納入を早い時期に請求したため、納入状況はよくなっている。日本学会事務センターで学会誌を買上げたため、予算をこえる収入があった。今後は寄付金、ボーナスカンパ、などによる収入増を図ってゆきたい。

支出については、学会誌をすでに2冊刊行している。本年度大会特集号は近日発行予定（この短信発行以前にお手元に届いている）である。今後は、短信の発行費用、通信費、会議費などの支出がみこまれるので、これらの支出増によって、財政はきびしくなることが予想される。

したがって、今後は各種の支出の節約をはかるとともに、カンパ、会費請求などの増収努力が必要である。（ボーナスカンパを依頼しておりますのでご協力下さい）。

3.学会誌の印刷会社の件

北日本漁業経済学会誌『北日本漁業』を発行している印刷会社から、引受けたいとの打診があるが、加瀬氏がコストやサービス面をくわしく聞くこととなった。

★在京理事会(2) (1989.12.6)

1.次期大会のシンポジウムテーマ

大海原宏氏に原案を再度提出してもらい、検討した結果、『日本漁業の国際化－生産構造へのインパクト－』というテーマで実施することに決定した。とりあげる内容は、水産物の需給構造、中小漁業経営問題、漁業労働力の需給構造、国際化への政策対応、などである。コーディネーターの大海原宏氏を中心に準備作業を進めることとなった。

2.学会誌に掲載された論文の著作権の帰属について

学会誌に掲載された論文の著作権は漁業経済学会に帰属すること、ただし、著者の意向に反しないものとする、について種々検討されたが、このことを投稿規定に明記し、事務的には全国理事会での報告事項として処理することとなった。日本複写権センターに委託することについては、継続審議とすることにした。

★寄贈文献の紹介

＊学会事務局に、次の文献が寄贈されました。お礼とともに報告いたします。

文献名	著者名	寄贈者
「日本全国書誌」	国会図書館	同左

－逐次刊行物の部－

「水産資料四季報」	水産庁資料館	同左
「漁業経営調査報告書 釧路水産部」	大喜多甫文	同左
「私の屑籠 14,15」	釧路水産部	土屋隆弘
	浅野 長光	同左

★ボーナスカンパの報告(第一次分)

過日、1989年度ボーナスカンパを行いましたところ、18名の会員各位よりカンパが寄せられました。ありがとうございました。さらにカンパは2月いっぱい受け付けますのでよろしく願いいたします。

募金者数 18名

募金者氏名(順不同 敬称略)

濱田 英 嗣	片岡 千賀之
益田 庄 三	島 秀 典
鶴田 正 裕	大島 襄 二
廣吉 勝 治	岩崎 京 至
篠 半 吾	長浜 真 一
小熊 辰 雄	吉田 泰 治
増田 洋	大海原 宏
米田 一二三	上田 不二夫
石原 義 剛	増井 好 男

＊ご協力ありがとうございました。

なお、会費かボーナス・カンパかの明記のない方については、会費納入状況と照らして判断させて頂きました。従いまして、募金をされた方でもお名前の載っていない方、また、会費を納入したつもりで募金者とされている方がおられるかも知れません。その際は、事務局までお知らせ下さい。

最近の西日本漁業経済学会

出張から帰ると原稿依頼の手紙がきていた。西日本漁業経済学会の最近の状況をまとめるよにとのこと。(西日本)漁業問題研究会の間違

いかと思ったが、そうでもないらしい。学会の機関誌に他の学会の紹介を載せるとは、理事でもなければ事務局でもない小生にお鉢がまわろ

うとは信じがたいが、気楽に書けということかとも思い、駄文をろうすることにした。ちなみに学会事務局は近畿大学が3年間の重責を果たし、現在長崎大学水産学部に移っている。

会員は220～230名で、横這い状態である。「高齢者」の脱退を上回る若手の加入はあるが、若手は大学院生が多く、就職いかんでは脱退していくから横這いなのである。会費がディスカウントされる若手の比重が高まると財政的には苦しくなるとしても活気がでてくるので好ましい。会員は西日本だけでなく全国にまたがり、北海道や関東の人もいて漁業経済学会のそれとかなり重複している。韓国を始めとする外国人もいたり、水産団体、行政、教育機関の人も多く、幅広く、かつ漁業問題の現実を踏まえているのが特徴といえよう。地域の人達と交流を深めることがこの学会の目的でもある。

大会は年1回、秋に西日本各地で開いている。学会発足から31年経過したので、2巡目ないし3巡目に入りつつある。31回大会を開催した鹿児島県にとっては3回目で、過去2回は鹿児島市で実施したが、今回は坊津町で開いた。各地で開催し、懇親会もあり、エクスカージョンもあるので、古参会員の中には香住のカニがうまかったとか、下関大会に参加できなくてフグを食べ損ねたとか、徳島県にはまだ行ったことがないから是非そこで大会をやろう、なんてことが話題になったりする。会員相互も和気あいあいといったところである。もちろん、大会自体は真面目にやっており、個人報告やシンポジウムは活発に行われている。個人報告は毎年12～13位あり、うち3～4つは地元関係者が報告している。シンポジウムのテーマは、開催県の会員が中心となって理事や地元関係者と相談し、地元の抱えている課題を踏まえて決め、適当な人に報告を依頼している。最近5ヶ年の開催地とシンポジウムのテーマは以下の通りである。

1985年 高松市 沿岸漁業の見直し

1986年 香住町 沖合漁業の諸問題と再編課題

1987年 鳥羽市 養殖業をめぐる技術と経営

1988年 福岡市 水産物付加価値向上における諸問題

1989年 坊津町 漁業再編下における地域漁業の課題

詳しくは、創立30周年記念ということで出版された「転機に立つ日本水産業」（九州大学出版会、5,500円）に学会の歩みが収録されているので、参照されたい。それにはシンポジウムのテーマや個別報告が網羅されており、社会経済の推移に伴ってどのような課題が設定され、どのような地域の漁業問題がとりあげられているかが一目瞭然である。近年は、地域漁業の振興方向をめぐる議論が中心となっている。

さて、学会が抱えている悩みもいくつかある。そのベースは会員が少ないことである。会費だけでは大会の開催や会誌出版などの費用が十分まかなえないことから開催地で協賛金を募っている。水産をとりまく環境が厳しいといいながら地元負担をかけるのは心苦しいし、現地の事務局も大変であることから、会費を据え置きにして大会をなるべく簡素にする方法が模索されている。また、シンポジウムのテーマ設定も地域の問題にも触れながら個別事例に埋没しないような工夫や適当な報告者を捜し出すことも大きな課題であろう。

今回の坊津大会の開催を手伝って得た感想を述べておこう。

(1)事務局からは各府県の水産課や漁連、水産団体へ、県下については我々から会報や大会案内状を送付することによって、いろいろな方が出席してくれた。水産経済の仕事に携わりながら学会があることを知らなかったりするので、活動内容を知らせたり、参加する機会を提供することが重要だろう。

(2)大会期間中に地元の人と会員とで談話会を行った。多くの人が参加したが、肩肘はらずに酒を少し飲み、郷土料理をつまみながら活発な意見交換ができた。この学会は、そうした関係者の悩みに応えていく、悩みを共有することも使

命であろう。最初の試みだったので、不十分な点はあっても、積み重ねによって「炉端懇談会」のノウハウを蓄積できるのではないか。もっと

も、事務局の苦労は増すだろうが。

(文責 片岡千賀之)

「20周年を迎える北日本漁業経済学会」

北日本漁業経済学会は、今年度第20回大会を迎える。本学会は、60年代の「高度成長」経過し、物価問題、公害問題等の経済の「ひずみ」が顕在化した時代に創立された。また、日本漁業においては一方で魚価上昇に刺激された生産拡大と他方で工業地帯の拡大、原発立地による沿岸漁場の縮小傾向の下で構造的変化が進行していた時期でもあった。

こうした状況の下で北日本漁業経済学会は、地域の漁業者および研究者と密着した調査研究活動に基づく議論を進めてきた。それは、その間のシンポジウム・テーマを列記すると一目瞭然である。70年代は、地域開発、公害問題に関するテーマが圧倒的に多い。

しかし、80年代に入ってから様相が一変する。漁業管理、漁協の機能についてのテーマが多くなり、沿岸漁業の再生が議論の中心にすえられる。こうした点は、北日本漁業経済学会が、漁業現場の直面している問題を学会テーマとするという創立以来の伝統に基づくものである。そうした意味で学会における議論的な詰めが弱いとの批判もあるが、同時に問題に関する各地の典型的な事例を集約し、議論してきた功績も大きいと思われる。

このような本学会の行方は、当分変わらないであろうが、今は漁業がおかれている状況を考えると事例研究にだけ止まっているわけにはいかないことも確かである。生産現場に立脚した漁業の在り方を、日本経済との係わり、そして世界的枠組みのなかで、考えることが重要となっていよう。

そうした課題を意識しながら第20回大会は以下のテーマでシンポジウムを行う。

- テーマ 1. イカ漁業を巡る諸問題と将来展望
2. 大型産地における流通・加工を巡る諸問題と将来展望

このテーマは、開催地八戸市の漁業と地場産業を考慮したものであるが、イカ漁業の報告者にはアルゼンチンの研究者も加わり、多少国際的な性格も付加される。いずれにしても、北日本という地域学会としての役割を果たすとともに、内容は日本のそして世界的視野に立った報告討論を目指したと念願している。

1990年1月19、20日(金、土) 八戸市水産会館に多くの方々が参集されることを期待している。

(文責 北日本漁業経済学会事務局

増田)

国際漁業研究会の動向

国際漁業研究会は、1985年5月31日に日本大学経済学部で第1回定例研究会を開催し、正式に発足した。『国際漁業の研究』を第3号まで発行している。第4回の研究会はエビ漁業をテーマに2日間にわたって、9つの報告がお

こなわれたが、印刷物としては未刊にとどまっている。

1989年10月の第5回定例研究会では、発展途上国における沿岸漁業の管理問題(千国史郎)、諸外国のサケ・マス養殖事情(小松達人)

ポリビャ、ペルーの水産事情（小野征一郎）の報告がおこなわれた。

『国際漁業の研究』は休刊となっているが、[会員の研究成果は、海外漁業協力財団の刊行

物に掲載されることとなっている。

国際漁業研究会（会費は年間3,000円）の活動は新たな時代の課題を背負って継続していくことになる。（文責、増井）

復刻本の紹介

東洋捕鯨株式会社 編 明治期 日本捕鯨誌

本書は明治43年に東洋捕鯨株式会社編『本邦の諾威式捕鯨誌』として発行されたものを全面的に複写再生を図ったものである。原書はノルウェー式捕鯨業の全般的概説を意図しつつ、編纂された社史であるが、周知のように、東洋捕鯨は前年（明治42年）、さまざまな問題に対処する為当時の大手捕鯨4社が合同して設立されたものであり、当時の急速な発展期から欄

熟期にさしかかっていた斯業を取り巻く歴史事情が読みとれる。明治期漁業近代史を考究するに不足のない資料である。原書は希書でありバカバカしい骨董的価格でしか入手しえないので、研究するものにとってまことに有り難い企画といえる。

本復刻本は「西日本鯨研究会」（事務局、水産大学校）を主宰する会員有志の活動によって上梓の運びとなったと聞く、敬意を表する次第である。（東水大 廣吉記）

発行所 マツノ書店 頒価 5,000円

〒745 徳山市銀座2-13

（TEL 0834-21-2195）

会 員 動 向

▶入会者

アブドイルモネイム マハモド

北海道大学大学院

（住所）上磯郡上磯町七重浜1-10-33

アーバン谷404（0138-49-0483）

ジョン アブロール 北海道大学大学院

（住所）函館市の場町9-23

大興マンション102

吉 田 泰 治 農業総合研究所

（住所）横浜市港南区港南4-6-1

港南中央住宅5-506

（電話）045-845-2624

▶退会者

▶物故者

五十嵐 暢 佐 藤 栄

小 沼 勇 田 畑 喜代男

添 田 秀 男 西 村 章 作

菅 原 洋 一

▶住所変更及び職場変更（訂正分）

石田 正昭 津市観音町403-2

石原 義剛 鳥羽市浦村町大吉1731-68

（電話）0599-32-6006

大島 襄二 帝塚山学院大学

蔭山 純由 高知県水産局水産課

外間 源治 広島市佐伯区千同一丁目9-3-3

田平 紀男 890-01

張 瑛秀 東京水産大学国際交流会館407号

（電話）03-450-6235

土井 仙吉 福岡市城南区鳥栖5-14-27

（職場）亜南学院大学（092-841-1311）

中居 裕 下関市稗田中町5-33-502

永野弥三雄 浜松大学

根本 甚市 那珂湊市磯崎町3677-1

服部 昭 八戸市大字田面木字赤坂7-5

（電話）0178-46-0857

古田 悦造 187 小平市階田町262-22

（電話）0423-24-5990

養田 端徳 891-07 揖宿郡額娃町牧の内2000

（職場）額娃高校

第 37 回漁業経済学会大会のご案内

1990年度(第37回)漁業経済学会を下記
の要領で実施いたしますので、多数の会員が
参加されますようご案内いたします。

1.大会日程

平成2年5月26日(土)～27日(日)

2.大会会場

東京水産大学

(〒108 東京都港区港南4丁目5-7)

電話 03-471-1251

3.大会参加費用

大会参加費 2,000円(当日会場にて受付)

懇親会費 未定(当日会場にて受付)

4.シンポジウム(5月27日)

『日本漁業の国際化

—生産構造へのインパートナー—』

コーディネーター

大海原 宏(東京水産大学)

司会 増田 洋(北海道大学)

増井 好男(東京農業大学)

テーマ及び報告者

(1) 水産物の需給構造

秋谷 重男(埼玉大学)

(2) 中小漁業経営の当面する問題

服部 昭(八戸大学)

(3) 漁業労働力の需給構造

三輪 千年(海上労働科学研究所)

(4) 国際化への政策対応

佐 作五六(海外漁業協力財団)

5.個別報告(5月26日)

◎ 第37回大会への一般報告の募集!

第37回大会は、東京水産大学で5月25日、
26日の両日開催することで準備が進められて
います。つきましては、一般報告の募集をして

います。テーマが決まりしだい学会事務局に4
月10日必着でご一報下さい。

会員各位の多数の応募を期待しています!

学会短信 1659

1990.1

事務局

〒108 東京都港区港南4-5-7

東京水産大学内

電話 03(471)1251